

真珠養殖発祥の地、 海女が日本一多いまち鳥羽

総務課広報情報係 ☎ (25) 11114

鳥羽で生まれた真珠養殖

1890年、相島（現在のミキモト真珠島）で御木本幸吉翁が真珠養殖の実験を始めました。当初は、アコヤ貝に入れる核を何にするか、核をどこに入れるのか、またアコヤ貝の育成環境などさまざまな問題がありましたが、幸吉翁は1893年に半円真珠の生産に成功し、12年後には英虞湾で真円真珠の生成に成功しました。

また、1918年には、さまざまな実験の中で良質な真珠が多く生産できるようになりました。1924年、フランスの裁判所から天然真珠と養殖真珠は同じものという鑑定結果を受け、ミキモト真珠は世界に知られていきました。

鳥羽と海女

海女とは、素潜りでアワビやサザエをとる漁を^{なりわい}生業とする女性のことです。

鳥羽の海女の歴史は古く、浦村町にある3,000年前の白浜遺跡から、アワビの殻やシカの角でできた道具などが見つかっており、万葉集や歴史の書物にも海女がたびたび現れるなど、鳥羽の海女が数千年も前から活躍していることが分かります。

現在、日本には約2,000人の海女があり、鳥羽では約505人の海女が活躍しています。

養殖真珠を支えた海女

かつて、海女は真珠の養殖に欠かせない存在でした。海底に潜りアコヤ貝を採取し、核を入れた貝を海底に戻す。また、赤潮や台風の時には、いち早く貝を安全な場所に移すなど海女の活躍なくして養殖真珠の成功はなかったことでしょう。ミキモト真珠島では、8人の観光海女があり、昔ながらの白い磯着を身にまとい当時の作業の実演を行っています。

今回は、ミキモト真珠島で海女の実演をしている答志島出身の濱口真理子さんに話を聞かせていただきました。



濱口 真理子さん

なぜ観光海女の仕事をしてみようと思ったのですか？

祖父母が漁師をしていて、海女という仕事が身近にある環境で育ってきました。子どもの頃から祖母の海女漁に遊びの延長でついていくことがあり、自然と海女や海に触れてきました。

仕事として大好きな海で海女ができればと思い、観光海女という仕事を選びました。



なぜ、漁業としての海女でなく観光海女を選ばれたのですか？

地元の答志では、海女漁は1年中できるわけではなく、限られた期間しか潜ることができません。でも観光海女は1年中仕事ができるのでこちらで海女をしています。

もし、漁業の海女が1年中潜れるなら、そちらを選ぶかもしれません。(笑)



海女漁で初めて獲った獲物は覚えていますか？

初めて祖母の海女漁について行ったのが、小学3年生の時でした。獲物を獲るようになったのは、小学5・6年生のころです。まだ、海に潜るのではなく、磯で石を裏返すなどしてガゼ（バフンウニ）を獲っていました。

観光海女の仕事はどうですか？



観光海女は、獲物を獲るのではなく魅せることが仕事なので、漁業の海女とは全く違い、別の難しさがありますが、楽しく仕事をしています。やっぱり海に潜ることが好きなので楽しいですね。

今後の目標や思いがあれば教えてください。

来年、サミットが開催されることで世界中に、ここ伊勢志摩が知られると思います。海外の観光客のかたが増えたらいいですね。また、市内のかたでも子どものころ行ったきりというかたが多いと思います。久しぶりにミキモト真珠島に来ていただき、私の海女作業を見ていただけたらと思います。